

[特別活動]

「評価活動」を生かした生徒会活動の取組について

－「自己存在感」、「自己有用感」の創出を目指して－

荒木 充*

1 はじめに

小国地域は平成17年4月に合併した長岡市の南部に位置し、中央に渋海川が流れ、東に関田山脈、西に八石山脈に囲まれた周囲約44kmの盆地にある。そして、当校はのどかな田園風景が広がる中にあり、現在、生徒は穏やかに、そしてのびのびと学校生活を送っている。

筆者が平成18年に現任校に勤務した当初は、生徒が落ち着いて諸活動に励むことが困難な状況にあり、また、生徒会活動に対する全校生徒の関心が低く、足並みをそろえてお互いに向上していこうとする姿勢に乏しかった。そのような状況の中で行われていた活動は、生徒会本部と会員相互との意識と距離が離れすぎていること、また、生徒会本部と各専門委員会との相互の働きかけや連動、高め合う場面がほとんど見られず、それぞれの活動が単独・単発的に終わっていた。結果として、生徒会活動が生きた活動になっておらず、「自己存在感」、「自己有用感」というものが、学校生活全体を通じて得難い状況におかれていた。

生徒会活動は、堀口(2006)が、『『自治的かつ自主的な活動』そのものの質を上げることが、望ましい社会性や自主性を育てることができる』、また、小出(2007)が、「生徒の自浄作用で学校生活を充実させることができる」と述べている通り、学校生活の中で重要な役割を担っており、ひいては積極的な生徒指導の一環に結びつくものである。したがって、生徒会活動を工夫・改善をしていくことは、生徒の物事に向かう姿勢や学校の雰囲気や質そのものが、大きく変容する鍵になると考える。

本稿では、筆者が生徒会担当としての分掌にあった平成18年度からの課題や問題点に対して、改善・解決へと向かう方策について、主として平成19年度の9月から平成20年度前半にかけて行ってきた生徒会活動に関する実践研究を述べる。

2 実践上の課題

当校の生徒の様相として、2つの大きな課題があると認識している。

1つは、人と人との関わり方が閉鎖的で、固定化する傾向が強く、「人間関係づくり」が苦手である。例えば、他校と交流する場面ではこちらから言葉を交わすことや積極的に関わることができない、諸活動に関して尻込みをする、大会等の遠征先で極端に萎縮してしまう、など非常に脆弱に感じられることが多い。これは、都市部と比べて交通の便が悪く、周囲との交流や接点が比較的得難い地理的条件の影響も多少なりともあるのではないかと考えられるが、とりわけ、①他との関わりや刺激を受ける機会が非常に少ないこと、そして何より、②自分自身に自信が持てず、他人から認められる機会・経験が少ないこと、などが要因として挙げられるだろう。

もう1つの課題は、生徒たちが備えている常識というものが世間一般に比べて極端に狭く、時として「誤った自分たちの価値観」で行動してしまうことで、後々大きな問題となることがしばしば見られることである。これは、生徒たちの育ちや環境など複合的な要因もあると思われるが、やはり経験が乏しく、的確な判断力が備わっていない、あるいは育っていないために起こり得たということ強く感じる。つまり、ある事象に対して、その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて判断して、決定し、責任をもって行動する、「自己指導能力」が未成熟なために、後々反省を伴う行動に至ってしまうものと考えられる。

そのため、これらの2つの課題に対処していくために、「自己存在感」、「自己有用感」を創出する生徒会活動の展開を図り、自信を持って諸活動に励むことと同時に、自分の行為に対して責任を持たせる意識の定着が必要だと筆者

* 長岡市立小国中学校

は考えた。そして、狭い人間関係にこだわることなく視野を広げ、自己だけでなく他人を思いやる精神の涵養を図っていきたく考えた。

3 実践課題の解決への手立て

当校には生徒会本部と10の専門委員会、3つの学年委員会が存在していたが、冒頭で述べたとおり、それぞれの「連動性」と「補完性」は必要不可欠なものであるにもかかわらず、有機的に機能しているとは言い難い状況であった。そこで、前述した課題を克服しつつ、「学校の質」自体も改善の方向に向かわせるために、自浄作用が見込める「生徒会活動」の在り方について吟味と改善を行い、その上で生徒が本来持っている力を引き出すことで、「自己存在感」、「自己有用感」をはぐくんでいけるように、手立てとしては以下の①～③の流れに基づいて実施した。

- | |
|---|
| <p>① 全校生徒による評価活動の実施
⇒ 生徒会活動への積極的な関わりを促し、相互の「評価活動」を行うことで、客観的に自分たちの活動・行動を見つめることができる機会・経験を積む。</p> <p>② 評価活動を受けて、改善策の考案と実行
⇒ 自己の活動について振り返りと改善を促し、責任を持った行動を自覚させる。また、他者に対する見方や考え方を学び、お互いを高め合う意識を育てていく。</p> <p>③ 生徒会本部と各専門委員会との連動性と補完性の構築
⇒ 生徒一人一人の生徒会活動への意識を高め、「自己存在感」、「自己有用感」を創出し、様々な学校生活の向上化への進展を目指す。</p> |
|---|

なお、データは平成19年度の9月、12月と、2回行った評価活動の結果を主として用いることとし、生徒会活動に対する意識の変容を探るものとした。

4 実践の成果と考察

(1) 「全校生徒による評価活動の実施」

生徒会活動において「評価」を行う場面としては、①各月ごとにおける専門委員会活動についての課題と反省を出し、翌月への活動につなげていく短期的なスパンで行うものと、②前期生徒総会における計画等を、後期生徒総会において総括的に分析・報告し、次年度への展望を描こうとする長期的なスパンで行うものとの2つがあるものと思われる。

当校の実情について言及するならば、前者はほぼ内部的な反省のみで占められていて、新たな活動を開拓していく精神や発想に乏しく、マンネリ化した話し合いに終始しがちであった。たとえ、全校生徒からの要望という形で外部からの声があり、新たな活動を精力的に展開したとしても、全校生徒に対してアピールする術が未熟なために、活動の質よりも効果が薄く感じられるケースが多かったように思われる。

一方、後者は全校生徒が一堂に会して話し合うということで、外部批判的な面や、新たに創出されたアイデア等を明確に認知でき、前者に比べて活動の改善に効果があると考えられる。しかし、この会自体1年間の締めくくりという意味合いが強いため、ここで出てきた有望な意見等を生かして活動の改善・向上を図っていくには、「すでに時間が残されていない」、または「したくてもできない」、というのが現状であった。

それでも、次年度以降に改善を期した活動を展開しようとした場合にも、メンバーの交代という大きな障壁がある。新たに代わったメンバーで、前年度の反省を克服する理念を体現できるかといえば、まず、生徒個人の力量と意識の差でズレが生じる可能性があり、疑問符がつく。また、前年度積み残した活動に対する責任の所在が不明になり、結局当初持っていた崇高な理念は薄まり、「絵に描いた餅」で終わっていた。つまり、何も前進することなく1年間が無意味に過ぎていたということである。

さらに付け加えるならば、生徒会活動に携わる職員の入れ替わりも毎年必ずあることで、春先から革新的な動きを醸し出してくれるケースは稀で、概ね「前年踏襲というマンネリ化」からの脱却は避けられるべくもない状況であった。

したがって、評価活動における両者の問題点を改善し、効果的な手法を考えていく視点として、まず、①全校生徒から前提となる「評価」を受け、それを数値化させた後、「中間的な総括を行う場

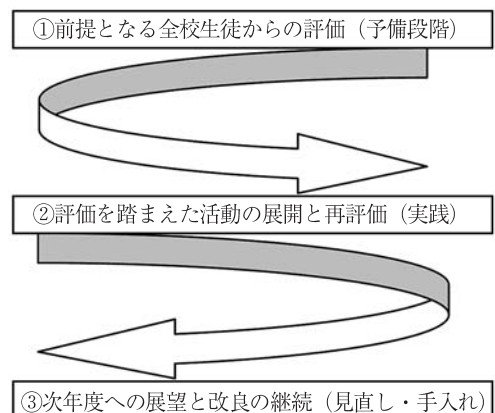


図1 評価のスパイラル化

面」を設けること、それらを踏まえて、②一定の期間を設定した上で、勘案した活動を展開し、それに対して全校生徒から「再評価」を受けること、そして、③数値の変化を分析して、次年度以降も継続して改善を図っていくための道標とすることとし、それらが図1のように有機的なスパイラルになるよう、諸活動を展開させていくことにした。

① 第1回専門委員会評価アンケートの実施

ア 全校生徒による「他者評価」(平成19年9月11日実施)

平成19年度は、筆者が生徒会担当2年目ということで、1年間の流れをある程度把握できたこと、また、先ほど述べた課題が明確になってきた時期であった。

そのため、改善を図るのであれば最初が肝心と考え、新本部役員、新専門委員長への意識改革を図るべく、春先に生徒会リーダー研修を行い、リーダーとして必要な資質の高揚を図った。以後、生徒会活動に対する前向きな意識は、委員長から委員、そして全校生徒へと徐々に浸透していった。

そして、時期的に1年間の中間点に当たる9月当初に、全校生徒による専門委員会の評価アンケートを実施した。内容は、本部、10の専門委員会、3つの学年委員会の活動を、4段階(大変よい、良い、あまり良くない、良くない)で評価を行い、また、肯定的な評価と否定的な評価とを、先ほどの前2つ、後2つで区別し、数値で表すこととした。

結果は【表1】にあるように、肯定的な評価が概ね90%を越える委員会が多く見られた。これは春先からの真摯な活動が、素直に評価されたものと受け止めることができる。また、その一方で、冷静な評価をもらった委員会もいくつか浮かび上がった。

当然、どんな形であろうと何らかの活動が生徒たちの目に触れ、記憶に残っていたとすれば肯定的な評価になりやすく、逆に地道な活動をしていたのだが、目立たなかったがために生徒たちに認知されなかったケースでは、評価を下げてしまう傾向になると想定される。

生徒たちにとって、今回の数値で評価されたことは、「励み」として、あるいは「反省材料」として、今後の活動において改善・展開していく布石となり、いずれにしても「課題意識の触発」という点では、一定の効果が期待できることが考察できた。

委員会名	肯定的評価(%)	否定的評価(%)	それまでに行った主な活動
洪海会本部	93.6	6.3	生徒総会、いじめ0スクール集会の運営
生活委員会	95.4	4.6	あいさつ運動、学習規律強調週間の実施
応援委員会	97.1	2.9	あいさつ運動、応援練習、各種激励会の運営
整美委員会	95.4	4.6	花壇の水遣り、清掃強調週間の実施
図書委員会	75.3	24.7	図書当番、図書の整理
放送委員会	94.8	5.2	昼の放送、授業前の呼び掛け放送
交通安全委員会	85.1	14.9	ピロティール巡視、交通マナーの呼び掛け
体育委員会	90.2	9.8	昼休みの体育館巡視・片づけ当番
保健委員会	97.1	2.9	保健当番、マスクチェック、牛乳残量調査
広報委員会	94.3	5.7	掲示物の張り替え、学校新聞の発行
福祉委員会	89.1	10.9	ヘルマーク集計、書き損じはがき集め
1学年委員会	95.3	4.7	授業時の号令、学年朝会の企画、運営
2学年委員会	95.8	4.2	授業時の号令、学年朝会の企画、運営
3学年委員会	95.0	5.0	授業時の号令、学年朝会の企画、運営

イ 各専門委員会による「自己評価」と、中間総括会(平成19年9月28日実施)

前述の全校生徒から評価を受けることと同時平行で、委員一人一人の生徒会活動に対する意識を一層高めることをねらいとし、各専門委員会内で「自己評価」を行わせた。これは、やりっぱなしの活動に終始するのではなく、それまでの活動について振り返り、「計画性の有無」、「実行力の有無」、「組織としての機能性の有無」を分析し、且つ、全校生徒からの評価についての「妥当性」を検証することで、今後の活動をより発展させていくための改善策を模索し、再度の全校評価に向かう気構えと展望を持たせる機会であった。

加えて、数値で示された全校生徒からの「他者評価」と、各専門委員会が持ち寄った「自己評価」から勘案された改善策を持ち寄り、リーダーの役割を担う生徒たちによる、ミニ生徒総会とも言うべき「中間総括会」を実施した。

しかし残念なことに、会自体は終始報告会の形だけで進行し、得るものがほとんどない形で終了してしまった。筆者としては、各専門委員会から出された様々なアイデアをもとに、活発な討論が繰り広げられることを期待したが、①生徒たちは自分たちの活動についてだけしか考える余地がなかったこと、②各々の活動について十分な反省をし過ぎたために、外部の生徒にはそれ以上討論の間口を広げる材料がなかったこと、そして何より、③周囲に対して「課題意識を触発する」発言ができる生徒が育っていない、という課題が表出した。特に③については、あらかじめ生徒会本部の生徒に、各専門委員会に対して指摘のできる「憎まれ役」になる必要性を言及しておいたが、「仲間意識」が先立ち、「悪者」になることを拒んだ形となった。

このようなせめぎ合いの経験の無さは、当校生徒に顕著に見られたことであったが、周囲と違う考えを持つ、あるいは感じた場合に、「遠慮などをすることなく、自分の意思を伝え合う姿勢と覚悟」を持たなければ、ただの馴れ合いの活動に終始し、今後の発展的な活動へは昇華し得ない。お互いにプラスになる視点を持たせるためにも、討論の

在り方など、新たな課題が浮上してきたのである。

(2) 「評価活動を受けて、改善策の考案と実行」

① 第1回専門委員会アンケート後の諸活動(10～11月の2ヶ月間に実施)

これまでの経緯を受けて、2ヶ月間という限られた期間を設定し、再度全校生徒から評価を受けるべく、各専門委員会が創意あふれる諸活動に取り組んでいくことになったが、その活動内容は概ね、次のア～ウのパターンに分かれることとなった。

- | | |
|---|---------------------------------|
| ア | これまでの活動の継続、もしくは若干の補強的なもの |
| イ | 年度当初に計画をしていたが、季節的な活動のためこれから行うもの |
| ウ | 全く新たに活動を創出し、展開していくもの |

「ア」の傾向が強かった委員会は、やはり前回のアンケートにおいて良い評価を受けた委員会が多かった。それは、今までの活動が「数値化」されたことで、全校生徒の認知度が明確に証明され、「自信」という形になった表れだと推測される。言わば、ここで見られた姿は「自己存在感」、「自己有用感」の萌芽と捉えてもいいだろう。

一方、「イ」や「ウ」を展開していった委員会は、予想される通り、評価が芳しくなかった委員会であり、特に、「ウ」を行うということは「危機感」の表れと言える。しかし、そこにも「自己存在感」、「自己有用感」の萌芽は存在していた。つまり、「自分たちの行っている活動を、価値あるものと認めてもらいたい欲求の表れ＝自己存在感」、そして、「誰かの役に立てたという達成感、誰かに必要とされたという満足感を得たいという表れ＝自己有用感」と捉えることができ、「今回の結果は満足いくものではなかったが、次回評価される時には、『全校生徒の信頼を得たい、認められたい』、そのために改善を図っていかなければ」と、他者に対する見方や考え方を学ぶことで、自らをより高めていく意識づけになっていたからである。

② 図書委員会の改善策と取組み

ここで1つの委員会の歩みについて言及してみる。

図書委員会は、第1回専門委員会評価アンケートにおいて、肯定的評価が75.3% (4:20.7%, 3:54.3%), 否定的評価が24.7% (2:22.4%, 1:2.3%) という数字であった。単純に考えれば、4人に3人が図書委員会の活動について認知し、評価しているという結果であり、そう悲観するものではないと考えられるが、前掲した【表1】を見る限り、他の専門委員会に比べて一番低い数字であり、どうしても落ち込みが目立った。全校生徒から厳しい「評価」を突きつけられた生徒たちは、中間総括会において自分たちの活動を分析し、「決められた役割を、確実に、忠実に行う」という方向性を、開口一番に示した。

これは前述した「ア」の部分に関わると思うが、それまで生徒たちが行ってきた顕著な活動として、「図書当番(図書の貸し出し)」と、「図書の整理」程度が挙げられるのだが、実際の活動の様子はというと、「時折当番活動の不備があり、図書室の利用ができない」、また、「本が乱雑になっていても委員は整理をせず、図書室内が乱雑な状況になっている」、「図書室は静粛な場であるはずなのに、うるさくしている人を委員が注意しない」など、全校生徒からの不満の声が数字にストレートに表れていたと受け取ることができた。だからこそ彼らは、「できなかったこと」というより、「本来やらねばならなかった活動」に目を向け、歩みだそうとしたわけである。

また、「イ」及び「ウ」の部分に当たることとしては、①朝読書のために図書室から本を教室へ学級文庫として設置し、利用してもらうことと、定期的に入れ替え作業を行うこと、②「読書の秋」にちなんで「読書週間」の設定、③新刊図書購入のための全校アンケートの実施とその結果の公表、④購入した新刊図書について、図書室前へのポスターの掲示、⑤図書だよりの発行と放送を活用した全校に向けての広報活動、などを新たに行った。決して派手ではないが、自分たちで考え、できることから少しずつ活動を広げ、それが全校生徒の目に映る活動になっていく姿が見えてきた。

そして、上記の改善策を実施するにあたって、図書委員長も次第にリーダーシップを身につけ、月1回設けられていた定例の委員会の時間以外にも、必要に応じて委員を召集して打ち合わせを行い、組織としての機能も充実させていくなど、生徒自身の変容も現れてきた。それは、真摯に活動したことで自尊心が芽生え、諸活動に自信と誇りを持って取り組む姿であり、成長過程の表れと言っていいたいだろう。

③ 第2回専門委員会アンケートの実施

ア 各専門委員会による「自己評価」の実施(平成19年11月28日)

2ヶ月間の活動を実証するために、第2回の「評価」アンケートを実施した。その際、「自己評価」については、

前回と若干聞き方を変え、「各専門委員会に所属する委員の個人内評価」を行い、それをもとに最終的に各専門委員会の「評価」として数値化してみることにした。

それは、前回の自己評価は、あくまでも各専門委員会の総括的な反省として行ったため、具体的に次の目標に置き換えることができる数値などは算出していなかったが、今回は「委員会に所属する生徒個人が、どれだけ組織の一員として意識を持って活動したか」という、取組みへの意識の度合いを測ろうと試みたためである。

項目は、①4月から9月までの活動についてと、②10月から11月までの活動についての意識調査を、「他者評価」と同じように、4段階（大変よい、良い、あまり良くない、良くない）で行い、肯定的な評価と否定的な評価とを、先ほどの前2つ、後2つで区別し、数値で表すこととした。

結果としては【表2】を見る限り、①よりも②の数値が上回ったところもあれば、逆に下回ったところもあり、はっきりとした傾向を指し示すことはできなかった。

これは、ある委員会では「委員長が中心となり、委員一人一人がしっかりとした目的と意識を持って活動を展開していった」ケースもあれば、「委員長の意欲と委員の意識とのずれが生じたため、自己評価を厳しく、且つ、低く申告することで数字を下げた」ケースなど、様々な形態が見られ、客観性を持つことができなかつたためである。さらに付け加えるならば、もともと委員会に所属する委員の人数が少ないため、1人違うだけで大きな変化に見えてしまうこともあっただろう。

しかし、自分たちが運営してきた「組織としての様子や意識」が、数字の上からでも窺うことができたということは、より細やかな自省的な活動を展開したと言え、今後の活動に向けての動機づけとなったと考える。

イ 全校生徒による「他者評価」の実施（平成19年12月4日）

こちらは1回目と同じ形式で、「評価」＝「2ヶ月間の取組みについての成果」に直結するものとして実施した。つまり、数値の上下は「努力してきた証し」であり、同時に「漫然とした活動への痛烈な批判」、という見方になる。

結果は【表3】を見る限り、全体的な傾向として、ほとんどの委員会の肯定的評価が90%を超え、「短期間での活動と評価のサイクル」は、ある程度の活動の見直しと改善を促しつつ、生徒会活動の活発化を図るものとして、効果が生じたものと見て取ることができた。

特に、前述した図書委員会は大幅に数値が上昇したが、これには委員の意識改革と、地道な活動を継続する努力が全校生徒に受け入れられたものと言えよう。

他の専門委員会については、ここまで大きな数値の変動はなかったものの、ある種の「不安」と「期待」を胸に秘めながら、評価されることに対して一喜一憂する姿が見られた。その中でも生徒たちは、「今後へ向けての取組み」という視点をしっかりと持ち、自発的に物事を進めていこうとする態度が育ってきているように感じられ、少しずつではあるが、着実に生徒たちの中に「自己存在感」と「自己有用感」が創出できる取組みであったと考える。

(3) 「生徒会本部と各専門委員会との連動性と補完性の構築」

① 生徒会本部役員の専門委員会への出向

これまで「評価活動」を通じての各専門委員会における変容等を記してきたが、この「評価活動」の推進役であり、原動力となってきたのは生徒会本部の生徒たちである。

かつての本部役員の生徒たちは、与えられた仕事を着実にこなす「事務屋」的傾向が強くなり、生徒会本部と各専門委員会をつなぐ「連絡・調整役」、時には「指南役」である意識をほとんど持っていなかったことは、「中間総括会」の

【表2】第2回専門委員会評価アンケート（自己評価）の結果

委員会名	①4月から9月までの活動について、肯定的評価の割合(%)	②10月から11月までの活動について、肯定的評価の割合(%)
渉海会本部	100.0	100.0
生活委員会	100.0	100.0
応援委員会	100.0	100.0
整美委員会	93.3	93.3
図書委員会	86.7	93.3
放送委員会	100.0	100.0
交通安全委員会	87.5	75.0
体育委員会	93.3	100.0
保健委員会	92.9	78.6
広報委員会	100.0	90.0
福祉委員会	92.3	84.6

※ 学年委員会はメンバーが変わったので、割愛する。

【表3】第2回専門委員会評価アンケート（他者評価）の結果（回答生徒170名）

委員会名	第2回アンケート肯定的評価(%)	第1回アンケート肯定的評価(%)	前回との比較
渉海会本部	98.8	93.6	+5.2
生活委員会	98.2	95.4	+2.8
応援委員会	98.2	97.1	+1.1
整美委員会	91.2	95.4	-4.2
図書委員会	92.4	75.3	+17.1
放送委員会	93.5	94.8	-1.3
交通安全委員会	83.5	85.1	-1.6
体育委員会	85.9	90.2	-4.3
保健委員会	90.6	97.1	-6.5
広報委員会	95.9	94.3	+1.6
福祉委員会	96.5	89.1	+7.4

※ 学年委員会はメンバーが変わったので、割愛する。

ところで前述した。

そのため、平成19年度当初から本部役員をただの連絡役としてではなく、「担当する専門委員会の一員」として直接委員会活動に参加させ、同じ目線で生徒会活動に携わらせることにした。それにより、それぞれの専門委員会の苦勞や成果を共有することができ、次第に一体感が生まれていくこととなった。以後、細かなアンケートの集計作業やその趣旨に関する広報活動についても、生徒会本部と各専門委員会をつなぐパイプとしての働きをスムーズに展開することができ、「連動性」と「補完性」が形成されつつあったと考える。

② 後期生徒総会による検証と報告（平成20年2月15日）

この会は、各専門委員会による1年間の活動報告と反省、全校生徒から今年度と次年度についての意見交換を行い、今後に向けて締めくくりを行う場である。例年であれば、提案者側の一方的な結果論を述べ、盛り上がり欠ける形で終始していた。

しかし、今回の生徒総会における生徒の発言内容は、「良い点については認めながら継続を促し、不足があった点については具体的に改善策を示しながら伝え合う」など、前向きな発言が多く、本来この会の持つ意味合いと、生徒たちに期待すべき姿が随所に見られた。これには2回行った「評価活動」が、全校生徒一人一人に生徒会活動に対しての関心を高めることに寄与したこと、また、それに伴い、「自己存在感」、「自己有用感」が創出されてきたこと、さらに、自分たち自身が生徒会における主役であることを再認識し、様々な学校生活の向上化を推進することができたことが、この裏づけにあるものと考えられる。

③ 平成20年度 第1回専門委員会アンケートの実施（平成20年7月4日）

代替わりをし、新しい体制で生徒会活動が展開されてきたが、今年度は夏季休業に入る前に、前述した平成19年度の第2回アンケートとほぼ同様の形式で「評価活動」を行った。

昨年度からの「評価活動」を見てきた経験と、それを受けて「評価されること」を意識した上での活動をすでに展開してきた結果、数値の方も全ての委員会が肯定的な評価が90%以上、中には100%の評価も現れた。また、生徒たちが自分たちの活動について見つめ直す質問項目でも、自信を持ってやりがいを感じながら活動しているという回答が、ほぼ100%という数値で返ってきた。

着実に、生徒の質や学校の雰囲気の変容しつつあり、「自己存在感、自己有用感」が創出されつつあるように窺えるが、12月に再度「評価」アンケートを実施し、継続した比較対象データの集積を行い、今後の変遷について注視していきたい。

5 今後の課題

「評価活動」については、これまで述べてきた通り、いくつかの利点を生み出してきた。例えば、①委員として、組織の一員としての自覚の高揚が図られ、自発的な活動を模索するようになったこと、②常に向上しようとする姿勢を生み、様々な活動へ挑戦する意欲が湧いてきたこと、③他の委員会との比較による自尊心の萌芽、などが挙げられる。

特に③について強調したいのだが、冒頭に述べたとおり「課題意識の触発」が少ない状況の中で、「これぐらいいいのでは」という生徒の狭い範疇の考えを押し広げていくには、やはり「外部評価」を生かして、お互いの活動に目を向けさせる必要がある。今回は多少なりとも有効性があつたように思う。さらに日常活動の徹底、日々の振り返り、活動改善へ向けてのたゆみない努力を積み重ねながら、別の有効な手立てを生徒たちと構築していく必要がある。

反面、今後この「評価活動」がマンネリ化に陥ることも当然想定される。また、評価の信憑性についてもさらに検証を加える必要があるだろうし、次年度への展望を見出す先見性の育成は、まだ有効な手立てが行われているとは言いがたい。既存の人間関係の殻を打ち破っていく経験も、まだまだこれからである。生徒とともに教師側とともに知恵を絞り、切磋琢磨することで、さらなる「自己存在感、自己有用感の創出」と「学校生活の向上化」を図り、「自己指導能力＝判断・決定・行動する力」を確かなものにしていくことが、今後の課題と言える。

参考文献

文部科学省 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』、ぎょうせい、1999年

堀口晃一 「生徒の自治力・自主性を高める生徒会活動・行事の工夫」、『教育実践研究』第16集、上越教育大学学校教育センター、2006年、P.137

小出信也 「生徒の自浄作用で学校生活を充実させていくための方策」、『教育実践研究』第17集、上越教育大学学校教育センター、2007年、P.103